シェイクスピア作『ルークリースの凌辱』訳と注解（その一）

村里好俊
（英語英米文学科教授）

崇敬惜く値わざるサウサンプトン伯にして
ティッチフィールド男爵　ヘンリー・リズリー閣下
に献上仕る

不肖わたくしめが一身を擲（なげう）って閣下に捧げます敬愛の念には、果てしが御座いませぬ。敬愛から生じましたるこの小詩、始まり方も心得ませぬ端くれにして持て余しもの。確かにご受納頂けると致しましたら、それは閣下の誉れ高き御気性の賜物、学なき小生のふつつかな代物には聊（いささ）かもその価値なしと心得ます。小生の手に成りましたもの、手掛けようとしておりますもの、それはす

献呈の辞

五行　**始まり方も心得ませぬ**　『ヴィーナスとアドウニス』一-六行と同じく、本詩が「事の核心から」始まること への言及であると同時に、自らの無能と無価値を暗示し、詩の始まり方も心得ない不束者を衒う、へりくだった表現でもある。

七-八行　**手掛けようとしておりますもの**　何篇かがすでに書かれ、目下書き進めている『ソネット集』のことに言及しているのかもしれないが、『ソネット集』の献呈の辞に現れる「W・H」の正体がはっきりしない以上、はっきりしたことは言えない。

べて閣下への献納の品で御座います。小生の持ち物の一部でありますゆえに、敬愛して止まない閣下のもので御座います。小生の力量がいま少し高ければ、いま少しまともな忠義を果せるのではと悔やまれますが、当面は、しがないものでは御座いますれど、残らず閣下に捧げ奉ります。閣下の末永き人生がいよいよ目出度かれと祈念しつつ擱筆致します。

伯爵閣下の忠実なしもべ

ウィリアム・シェイクスピア拝

梗　概

ルーキウス・タルクィニウスは、その度外れた傲慢ぶりで〈高慢なるもの（スーペルブス）〉の異名を馳せたが、己の義父セルヴィウス・トゥリウスを残忍にも惨殺せしめ、ローマの法と慣例に反し、民衆の賛同を求めずまた俟たずして、自ら王国の長となり、その後、息子たち、ローマの貴族たちを率いて、アルデアの町の包囲戦へと赴いた。

その包囲戦のさなか、軍の主だった武将たちが王の子息、セクストゥス・タルクィニウス陣幕に一夜集い、夕食後の徒然なる四方山話で、

五

梗　概

この梗概自体はシェイクスピア自ら作成したと思われる、もっとも、その事実を明確に証明する証拠はないが。梗概が書かれた理由に関しては、サウサンプトン伯とその一派が梗概を必要としたとは思われず、出版者がシェイクスピア本人に依頼したか、あるいは、シェイクスピアが認可した誰かに依頼して、一般読者層を目当てにそれを提供したいと考えたのであろう。

一行　**ルーキウス・タルクィニウス**　ローマ建国以来の第七代目の王（紀元前五三四-五一〇）。彼の祖父で、第五代目の王ルーキウス・タルクィニウス・プリスクスは、奴隷から身を起こしたセルヴィウス・トゥリウス（紀元前五七八-五三五）に王位を譲って、第六代目の王に任じた。ルーキウスは、セルヴィウスの娘を娶っていながら、岳父である彼を殺害して第七代目の王となった。悪王で、内政の失敗を繰り返し、人民の注意をそこから逸らすために、近隣諸国と戦火を交えたといわれる。また、タルクィニウス一族は、元々、イタリア西部のエトルリア地方の出であったため、ローマ人からは好感を持たれていなかったとも伝えられる。

五行　**アルデア**　当時のルトゥリ族の首都で、ローマの南二四マイルの地点にあった。

六行　**セクストゥス・タルクィニウス**　上記ルーキウス王の第三王子、または第二王子とも。今後は、タークィンと英語読みになる。

各々が己の妻の操堅きを吹聴することと相成った。数ある自慢話の中で、コラティヌスは、愛妻ルクレティアの比類ない貞淑を褒めちぎった。愉快な戯れ気分に任せて、一同は急ぎローマへと取って返した。黙って出し抜けに帰来することで、各々が今しがた誓言した事の真偽を試してみようとしたのだ。とはいえ、ただひとり、コラティヌスのみであった、夜も更けてはいたが、侍女たちにかしずかれて、機(はた)を織っている妻の姿を盗み見したのは。他のご夫人方は、揃いも揃って、踊りに興じ、浮かれ騒ぎ、また手前勝手な遊び事に溺れていた。それを省みて、武将たちは負けを認め、コラティヌスに勝利を、彼の妻に名誉を授けた。

その折り、セクストゥス・タルクィニウスはルークリースの麗美さに心が燃え立ち、だが当座は己の情欲を包み隠し、一同と共に陣営に立ち戻った。ところが、やがて間もなく、こっそりと陣屋を抜け駆けし、王族の身分に応じて、コラティウムの町にてルークリースから心置きなく持て成され、宿を与えられた。その夜、彼は背信行為を企て、彼女の寝室へ忍び入り、暴力的に彼女を凌辱し、朝まだきに急ぎ逃げ去った。

このような悲痛な苦境に貶められたルークリースは、取るものも取りあえず、二人の使者を差し向ける。ひとりはローマにいる彼女の父

一〇　二五　二〇

九行　**コラティヌス**　ルーキウス王の甥、つまりセクストゥス王子とは従兄弟同士。後出のブルートゥスと共にルーキウス王をローマから追放して、自ら執政官になったが、やがてその地位を退いた。今後は、コラタインと英語読みになる。

ルクレティア　コラティヌスの貞節な妻。今後は、ルークリースと英語読みになる。

二〇行　**コラティアム**　ローマ南東のラティウム地方の都市。

二五行　**二人の使者を差し向ける**　本詩の中では、ルークリースが差し向ける使者は夫コラタインの許へのみである。ウィリアム・ペインター（c一五四〇-九四）が只ひとりローマへの使者とコラタインへの使者と二人を特定している。

の許へ、ひとりは軍営にたむろするコラタインの許へ。父はユニウス・ブルートゥスを伴って、夫はプブリウス・ヴァレリウスと共に帰宅し、ルークリースが喪服で身仕舞いしているのを見て、彼女の悲しみの謂れを威儀を正して問うた。彼女は、聞けば必ず復讐を、とまずは彼らの言質を取った上で、その張本人の名を明らかにし、彼の傍若無人な振舞の全貌を語り、その上で突然自らを刺した。

それを目の当たりにした人々は、一致団結して、憎んでも余りあるタークインの一族を一人残らず根絶やしにする誓いを立てた。それから、彼女の亡骸をローマに運ぶと、ブルートゥスは、犯罪者とその忌まわしい行為のあらましを民衆に熟知させ、現王の暴虐振りを口を極めて非難した。その言葉に民衆は心を動かされ、一同声を揃えて歓声のこだまする中で、タークイン一族は残らず追放の憂き目に会い、国の政治は王の支配を離れて、執政官の軍門に下ることとなった。

三〇

三五

＊　＊　＊

攻囲しているアルデアの町から一目散に
裏切り者の欲望の不誠実な翼に運ばれて、

二六行　**ユニウス・ブルートゥス**　ルーキウス王に父を惨殺されたが、自らは愚鈍さを装って危うく難を逃れた。ルクレティアの自殺を切っ掛けにして、タルクィニウス一族をローマから追放するために奔走する。後に、執政官になった。詩の中では、ブルータスと英語に読みになる。

二七行　**プブリウス・ヴァレリウス**　ブルートゥスを補佐して、タルクィニウス一族の追放に尽力する。後に、コラティヌスの跡を継いで執政官となった。本詩には登場しない。

本　詩

スタンザ形式は、ライムロイヤル（帝王韻）で、一連が弱強五歩格七行から成り、ａｂａｂｂｃｃの押韻を踏む。チョーサーが『トロイルスとクリセイデ』で、初めて英詩で用いた。一連六行で書かれた『ヴィーナスとアドゥニス』と対照的に、付加された一行は、各連の瞑想的な性格を高めるのに役立っている。出来事は「事の核心から」から始まり、見事な手際で物語は初めから主題の本質的核心部分へと切り込んでいく。

二行　**裏切り者の欲望の不誠実な翼**　詩人は、古典的手法である擬人化を用いる一方、主題的には「傲慢」の概念を導入している。「裏切り者の欲望」は「風評」、つまり、ファーマ女神のごとく飛び回り、「不誠実な翼」は、蝋付けの翼で父と共にクレタ島から脱出したが、あまりに太陽に接近しすぎたため、その蝋が溶けて海中に墜

情欲に駆られたタークィンはローマの陣営を抜け出し、
暗く燻る情火を胸底に隠し持ちコラティウムへと運ぶ。
火は青白い灰に埋れひそみ、ぱっと燃え上がっては
　炎となって包み込もうとする、コラタインの美貌の妻、
　貞節この上ないルークリースの腰を。

恐らく「貞節な」というその名が、不幸にも、
彼の鋭い欲情に鈍ることのない切っ先を付けたのだろう、
コラタインが迂闊にも、
彼の喜びのあの空に栄光に満ちて輝く
比類なく清らかな赤と白とを存分に褒め称えたときに。
　その空には、この世の二つ星が天の星星に負けずと光輝き、
　純真可憐な眼差しを夫だけに律儀に捧げている。

夫はその前夜、タークィンの陣屋で
己の僥倖という宝箱の鍵を開けてしまった。
神々は何と尊い富を彼に貸し与えたもうたことか、
美しい妻を与えてくださったのだからと。

五

一〇

一五

落して死んだという、傲慢なイカロスの運命を想起させる。

五行　**青白い灰**　「火」の真っ赤な炎と対照を為す。このような「白」と「赤」の対照は、例えば、一一-一四行及び五三-七〇行で描かれるルークリースの美徳を表す色合いの描写における「赤・白」の言語遊戯を予感させる。

七行　**ルークリース**　この名前は、本詩に三四回現れる。

一一行　**栄光に満ちて輝く**　原文では "triumphed". この言葉で暗示されているのは、文学作品や絵画において、寓意化された数々の美徳が凱旋の行列を作っている様である。例えば、ペトラルカ『凱旋』には、「貞節」の凱旋行列が描かれている。

一一行　**あの空**　ルークリースの顔のこと。「白」と「赤」との言葉遊びと宇宙的奇想の混合は、『ヴィーナスとアドゥニス』の冒頭の数節を想起させる。

一四行　**眼差し**　原文は "aspects". これは訳の通り、ルークリースが夫に捧げる尊敬の「純真可憐な眼差し」という意味と、太陽を視点として見た、星と星との位置関係とその状況という意味もある。

一七行　**貸し与え**　この語は、コラタインがやがて彼の所有物を失うことになることを、皮肉にも裏書している。

己の幸運を誇らしげに高々と値踏みして、口を滑らしたのだ、
王であれば、より大きな名望の御方と結ばれることもあろうが、
王侯方とて、これほど並びなき女を娶ることは出来まいと。　二〇

ああ、幸福を味わえる者の、何と少なきことか、
よし我が物としても、儚く衰え消え果てる定めか、
太陽の輝く黄金の顔の前で
溶けゆく銀色の朝露のごとく。　二五

始まったばかりでもう期限が切れて反故になる証文同然。
名誉と美は、たとえ己の腕にかき抱こうとて、
守りは弱く、山なす害悪に囲まれては為す術がない。

美の力だけだ、代弁者がいなくとも、
人の眼を自ずとその気にさせて屈服させるのは。
ならば、何の必要があろう、かくも類稀なるものを
持ち上げるべく賛美の言葉を連ねる必要が。
なぜにコラタインは吹聴役を演じるのか、
秘蔵の高価な宝であるから、大事に仕舞い、　三〇

一九行　**誇らしげに**　この行で「幸運」と「誇らしげに」が併置されているのは、不吉な状況を生み出す。古典的中世的悲劇の概念では、伝統的に、主人公が高く恵まれた幸運な位地から墜落するのは、しばしば知らずしての「高慢・誇り」と類似した何らかの罪を犯すことによってであるからだ。

二二-三五行　このように道徳を説く挿入語句が語り手の声によって述べられる頻度は、『ルークリース』の方が『ヴィーナスとアドウニス』よりもはるかに高い。

二二-五行　ここにはサミュエル・ダニエル『ディーリア』第四五番一-四行「美は、たおやかな恋人よ、朝露のようなもので／柔らかい緑の上に宿る束の間の清新な姿は／太陽が姿を現すまでの僅かの間、慰めを与えるが／たちまち、まるでなかったかのように消えてしまう」が反映されている。

噂一つも、盗人の耳には入らぬようにしておくべきなのに。　三五

もしかして、女王然たるルークリースを我が物とした彼の自慢話なのか、
この増上慢の王子を唆す原因となったのは。
私たちの心は、耳から入るものによってしばしば汚されるから。
もしかして、かくも高価な品物への妬み心からなのか、
虚勢を張って高貴を志す彼の想いが、蔑ろにされた腹いせに、　四〇
かえってその毒牙にかかったのは。上位の者が持たぬ黄金色の至福を
下位の者がひけらかすとき、それはよくあること。

たとえこれらのいずれでもないとしても、何か的外れの想いが、
彼のあまりに性急な早馬を先へと駆り立てたのだ。
名誉も、軍務も、友人も、身分も、　四五
すべて擲ち、逸る心に捕らわれて、彼は急ぐ、
胸のうちに赤く燃え立つおき火を消そうと躍起になって。
　向う見ずな欺瞞の熱よ、早や悔悟の寒気に包まれて、
　お前の慌しい春は常に霜枯れ、決して花開くことはない。

三五行　**盗人の耳**　あたかも耳自体を盗人になぞらえることで具体的に生き生きした表現になっているが、これは“catachresis”（濫喩）のよい例で、シェイクスピアは、“take arms against a sea of troubles”（海なす苦難に武器を取って立ち向かう。『ハムレット』三幕一場五九行）など、この大胆な比喩を劇的目的でよく利用した。

四七行　**胸のうちに**　原文は“in the liver”．肝臓は、当時の生理学では、愛と勇気、性的情熱、怒りなどを生み出す場所と考えられていた。

四八行　**悔悟の寒気**　肉体が情欲の興奮の後冷めて悔悟を表している様。老いの過程も示唆されている。肉体はどんなに渋々であろうと、情欲の活気はいまだ燃え上がる気配であるという意味。

四九行　**慌しい春は常に霜枯れ**　まだ時宜を得ない早春があまりに早足で駆けて行き、そのため遅霜で枯らされてしまう様。

この欺瞞の王子がコラティウムに着くと、
ローマの貴婦人に懇ろに迎え入れられた。
婦人の顔の中では、〈美〉と〈徳〉が競い合う、
どちらが彼女の名声を支えるべきかと。
〈徳〉が自惚れて得意がると、〈美〉は恥を知れと顔赤らめる。
〈美〉が赤らみを自慢すると、何をとばかりに
〈徳〉は銀白無垢の色で羞らいの赤らみを塗りつぶさんばかり。

だが〈美〉は、美神ヴィーナスの鳩が縁で、
白への権利を持ち、正々堂々の戦いを挑む。
すると〈徳〉は〈美〉からその赤らみを奪い取ろうと画策する。
〈徳〉はその色を黄金時代の人々に与えて、彼らの
銀の頬を飾らせ、彼らの守り楯と命名したのだから。
　こうして人々に、戦いの際、この色を使う術を伝授し、
　恥が襲撃したときは、この赤で白を囲んで守るべしとした。

ルークリースの顔の中では、この紋章模様が鮮やかに、
〈美〉の赤と〈徳〉の白とによって浮き彫りにされている。

五〇　五五　六〇　六五

五四行　**〈徳〉が自惚れて得意がる**　徳が徳らしくない振舞をするという逆説が本詩のスタイルの特徴。それは究極的には、運命の皮肉〈の認識と関わる。同じ行で、徳の自惚れと釣り合いを取って、美の慎みはひとえにそれ自体〈より鋭い関心を引き寄せることに貢献する。

五六行　**赤らみ**　原文は“ore”で、明らかに“ore”（金）との掛詞である。ここでは、「赤みを帯びた金色」の意。美の赤らみを徳が銀白の無垢の色で一面覆ってしまおうとしているというのである。

五八行　**正々堂々の戦いを挑む**　原文は“challenge that fair field”で、ルークリースの美しい顔を我が物であると主張する、とも解せる。その場合、六一行目の「守り楯」と相俟って、紋章の図案のイメージが重なる。美しい顔〈野原〉を地上の楽園になぞらえるアイデアは、エリザベス朝の詩では盛んに歌われた。例えば、『ヴィーナスとアドウニス』六五行目と同じく、トマス・キャンピオン（一五六七-一六二〇）の「彼女の顔には楽園がある」などを参照。

六〇行　**黄金時代**　徳は自らの白に美の赤を付け加えて、銀の時代を黄金の時代にし、こうして完璧さを成就したと力説するという意味。黄金時代とは、神話的楽園として古典期とルネサンス期に各世代の詩人たちに称揚され、常に純粋で穢れない幸福の場所であり、人生を惨めにする対立と矛盾とが和解し、悦びと徳とが花開く場所として位置づけられた。ルネサンス期には、例えば、イタリアの叙事詩人タッソ（一五四四-

赤と白の各々が他を支配する女王となり、
世の初めからの己の権利を証さんとしていた。
両者は己の野望を果さんものと、絶えず戦いを繰り広げる。
　しかして、いずれの主権もあまりに強大、
　しばしば互いの玉座を取り替えてしまうほど。

百合と薔薇とのこの静かな戦いを　七〇
タークインは彼女の美しい顔（かんばせ）、野の戦場（いくさば）で眺めた。
両軍の清純な軍勢に、反逆者の視線は囲繞される。
両陣営に挟み撃ちされ抹殺されることを怖れて、
腰抜けの視線は、自ら投降し捕虜となる。
　両軍に屈服すれば、大目に見てもらえると踏んだのだ。
　凱歌を上げるにも値せぬ、盗人猛々しい奴め。　七五

彼は思う、彼女の夫の浅はかな舌は薄っぺらだ、
あれだけ彼女を褒めながら、けちん坊の浪費家よろしく、
意気揚々とその役目を務めながら、彼女の美を辱めた、
その美は夫が不器用な技で描いた絵姿を遥かに凌いでいる、と。　八〇

九五）が、牧歌劇『アミンタ』のコーラスでその時代を褒め称えている。

六一行　**銀の頬**　徳は白と赤とを銀の時代と金の時代の住民として擬人化している。

守り楯　この語は、六四行から明らかなように、紋章的意味を担う。例えば、シドニー『アストロフェルとステラ』一三番九‐一一行に「そのとき愛の神、にっこりと微笑む。／彼の飾冠を装うのは、ステラの金髪、楯となるのはステラの顔、／その銀色の紋地には真紅の薔薇があしらってあったから」とある。

七三行　**反逆者の視線**　この比喩は、裏切り者の眼が戦いにおいて身の危険を感じ、百合と薔薇の両軍に同時に味方しようとして、投降するというものだ。この場合、実際の敵は戦いの外に潜むことになり、現実の人間的状況との類比を心に留めて書かれている。

七七行　**盗人猛々しい奴**　背信の考えがここで似つかわしいのは、タークインと同様に、眼がその視線の背後に隠れているものを明らかにしようとしないからである。

七九行　**けちん坊の浪費家**　過度でありながら、まだ誉め言葉が不足していること。この撞着語法は、例えば、薔薇と百合との美しき戦いに明白な、文体的原理を支持する。

八〇行　**美を辱めた**　悪事を働くのは、実際には、タークインの方である。

それゆえ、コラタインが褒め足りぬその賞賛すべき品を
　美の虜となったタークィンは、言葉にならない想いの中で
　　嘆賞する、いつまでもじっと凝視の眼を向けて。

この現（うつ）し世の聖女は、この悪魔に崇め奉られても、
この偽りの崇拝者をまるで疑わない。
汚れなき想いは悪意を夢にも覚えず、
鳥もちを知らない鳥は罠を仕掛けた藪を恐れないから。
こうして、罪を知らぬ奥方は無心に晴れやかな温顔を装い、
　王家の賓客を恭しく歓迎の挨拶で迎え入れる。
　　客の内面の企みは、外面にはつゆほども現れていない。

彼は、高貴の身分でその奥深い悪意を偽装し、
重ね折りした威厳の襞に卑劣な罪を隠匿した。
彼には不都合な挙措は一つも見えない、
ただ、ときどき見せる激しい驚嘆の眼差しを除いては。
彼の視線は、すべてを持ちながら、すべてに満足がいかない。
　貧しい富者め、富の中でもいよいよ貧しく、

八五

九〇

九五

八五-六行　情欲の罪が本詩で初めてあからさまなキリスト教的用語で提示されている。

多くに飽きて、なおも多くを渇望するとは。
だが、他人の目線を扱う術を知らない淑徳の貞女は、
交渉を企む眼差しから何の意味も汲み取れず、
怪しく光る眼底に隠された邪意を読み取れない、
眼という書物の透明な余白にはっきりと書かれていたのに。　一〇〇
彼女は見知らぬ餌に触れたこともない、釣針を怖れたこともない。
彼の淫らな視線をどう解釈したらいいものか、彼の眼が
光に向かって開かれているせいだくらいしか思いつかない。　一〇五

彼は、実り豊かなイタリアの戦場で勝ち取られた
彼女の夫の武勲の数々を彼女の耳に語りかけ、
コラタインの高き名声を褒めちぎる。
それは、傷跡残る甲冑と勝利の花冠とともに
夫の男らしい勇武によって輝きを増す。
喜びを、手を高々と上に挙げて彼女は表し、
無言のまま、夫の大勝利を天に感謝する。　一一〇

一〇二行　**透明な余白**　書物の余白は、注を書き入れ、本文の曖昧な箇所の意味を明らかにする場所であった。それゆえ、「透明な余白」とは、意図を明白に映し出す眼、の意味。例えば、キャピュレット夫人は娘の結婚相手、パリス伯の顔を誉めるに当たってこのイメージを利用する。「パリス様のお顔を書物と思って読んで御覧なさい。／美の神の筆が書いた喜ばしい物語。／調和の取れた容貌のそれぞれが／互いに助け合い、不満のない内容を作っている。／この美しい書物に分かりにくい箇所があれば／眼という余白にきちんと書かれています。／愛しい愛の糸に綴じられた事のない愛の書物／それを美しく仕上げるのは、妻という表紙」(『ロミオとジュリエット』一幕三場八一-八行。序ながら、この箇所の比喩表現は、余白は頁の端にあるのに対して、眼は顔の真ん中にあるという事実を無視することで機能している)。

一一一行　**手を高々と上に挙げて**　差し上げられた手は、挨拶または感謝の印を表し、舞台上の仕草としてお馴染みのものである。

彼は、ここに来たたくらみをひた隠し、
ここに留まるための口実をでっち上げる。
荒れ狂う嵐を思わせる雲の影ひとつだに
彼の麗しい顔の晴れ渡る空にはちらとも現れない。
やがて、恐怖の母、漆黒の夜が、
　世界の上に文目（あやめ）も分かぬ闇夜を広げ、
　丸天井の暗い牢獄に昼間を閉じ込める。　一一五

そのときタークインは、眠たげな表情で
疲れを装い、寝室へと案内される。
夕食の後、長いこと、淑やかなルークリースと
語らい、夜の時間を過ごしたのだ。
今や、鉛の眠りと生の力が激しく戦い、
　だれもが休息しようと引き下がる。
　目覚めているのはただ、盗人、心配事、思い悩む心のみ。　一二〇

タークインもその一人、寝返りを打ちつつ、
望みのものを手に入れる際の危険を様々に思い巡らす。　一二五

一一七-九行　サミュエル・ダニエル『ロザモンドの嘆き』四三二-四行に「眠りと恐怖の母なる夜が訪れた／逢引を楽しむ恋人たちの人目を忍ぶ甘い戯れを／漆黒の幕で覆い隠す夜が」とあるのを参照。

一二七-三三行　原文では、すべて女性韻になっている。

だが、思いを遂げるぞと決意するたびに、
根拠薄弱な希望が思い止まるように諭すのだ。
利得なしと絶望しても、意地になって手に入れようとするもの。
　莫大な宝物が褒美として差し出されれば、
　死が隣り合わせであろうと、死を思う者はいない。

一三〇

多くを欲しがる貪欲な者たちは、利得を得ることに夢中になり、
持っていないものを欲しがるあまり、いま持っているものを
使い果たし、その所有権を手放してしまう。
そうして、より多くを望みながら、かえって益少ない。
たとえより多くを得ても、過剰な富の利益は
　食傷肥満の元。かような悲痛をなめるとは、
　物は豊かでも、心は貧しく、破産も同然。

一三五

人々の目的は、老い衰えていく人生を
名誉と富と安逸とで育むことのみ。
この目的には、相矛盾する激しい争いが潜んでいて、
すべてのために一を、一のためにすべてを、我々は賭けるのだ。

一四〇

残忍な激戦の最中には、名誉のために命を賭ける。
　富のために名誉を賭けるが、しばしば、その富には
　すべての死という犠牲が払われる、すべてもろともに消えるのだ。　一四五

だから、ひとたび道を踏み外して危険を冒すと、
望むもののために、自分が自分でなくなってしまう。
この野心という忌わしい弱点は、　一五〇
多くを持ちながら、持っているものが少ないといって
我々を苦しめる。こうして我々は、持っているものを
　なおざりにしてしまい、その上、知恵を欠くために
　あだに増やそうと夢見ては、有を無に帰せしめてしまうのだ。

そのような危険を今や欲情に溺れたタークィンは覚悟せねばならぬ。　一五五
情欲を満たすには名誉を危険に晒さねばならぬ。
己の欲望を果すため己を捨て去らねばならぬ。
自らを信じる気持ちがなければ、真実はどこにあるというのだ。
いつのことか、他人を誠実だと得心したと思える日は。
　自分で自分の墓穴を掘り、中傷の舌と、　一六〇

惨めな憎しみの日々に自分を晒してしまうのであれば。

今や真夜中が己の持ち場へと忍び寄り、
重苦しい眠りが人々の目を閉ざしてしまった。
慰みを与える星ひとつ光を射さず、
聞こえるのは、梟と狼の死を予兆する叫びのみ。
今や狼どもがいたいけな子羊のねぐらを襲うのに
打って付けの時。清純な思いは死んだように寝静まり、
情欲と殺意が目覚めては、汚し殺そうと意気込む。

一六五

今や、情欲に燃え盛る王子は寝床から飛び起き、
外套を腕に荒々しく引っ掛けると、
欲望と恐怖の板ばさみとなって狂おしく揺さぶられる。
欲望は甘い声でおもねる、恐怖は危難に怖気づく。
だが、正直な恐怖は、汚れた欲情の魔力に魅せられ、
幾度となく身を引こうとする、
狂気じみた卑しい欲望に追い立てられて。

一七〇

一七五

一六二-八行　マローンが『マクベス』二幕一場四九-五六行との類似を初めて指摘した。「今、世界の半分では／自然も死んだように休み、帳の下りた眠りを／邪な悪夢が欺いている。魔女たちは青白いヘカティに／捧げものを奉納し、萎びた人殺しは／番人の狼に叩き起こされ／その唸り声にけしかけられて、忍び足で／凌辱を目指すタークインの足取りで、目当てのもとへ／亡霊のように忍び寄る。」

一六三行　シドニー『アストロフェルとステラ』九九番一-四行「夜は、早や更けて、すべての人々の眼を説得する／人工によっても、自然によっても、光は得られないので／その標的を失くした視力の矢を矢筒に収め／眠りの武器庫にしまうようにと」を参照。
シドニーの連作ソネット集は、愛と名誉と肉欲との厄介な関係を考察していて、『ルークリース』の瞑想的な表現に影響を与えている。もっとも、シドニーにおいては、男性主人公により大きな共感が寄せられてはいるが。

彼は半月刀で火打石を静かに打つ。
冷たい石から火花が飛び立つ。
蝋燭に火がともされる。
それこそ情欲に満ちた彼の眼には導きの星だ。
炎に向かい、彼は思慮深く、こう語りかける、
「この冷たい火打ち石から力ずくで発火させたように、
ルークリースを腕ずくでもわが欲望に屈服させねば済まぬぞ」。

ここで恐怖に蒼ざめて、彼は前もって思い巡らす、
この忌わしい企みがもたらす危険の数々を。
そして心の奥底で、狐疑逡巡してしまう、
これが元でいかな悲しみが頭をもたげることになるのかと。
それから眼には侮蔑の色を浮かべ、軽蔑する、
裸体に纏った、満たされても常に滅びる情欲の甲冑を。
そして、自らの不正な思いを正しく抑え、こう反芻する。

「美しい蝋燭よ、燃え尽きてしまえ、そしてお前を凌ぐ
あの女の光を翳らせるのは止めてくれ。

一八〇

一八五

一九〇

一八八行　この行の意味は、欲望は満たされると同時に果てるということ。絶えず蘇るが、結局は、同じくすぐさま果ててしまうという欲望の性質が、「常に滅びる」の意味。キトリッジに拠れば、「この企てにおいてタークィンの唯一の甲冑は情欲である。しかしそれは真の甲冑ではない、なぜなら満たされると常に殺される（滅びる、無となる）からである。そのような欲望の成就は、欲望それ自体を殺すことになる」。この解釈は、“still-slaught'red”を「絶えず抑圧される情欲」の意味と取るよりも、よりふさわしいと思われる。

邪悪な思いめ、死に絶えよ、お前の不浄さで
聖なるものを穢さぬうちに。
あれほど清純な社(やしろ)には清純な芳香を奉げよう。
　美しい心の人間には忌み嫌わせたいものだ、
　淑やかな愛の純白の衣装を染みで汚す蛮行は。

一九五

「おお、騎士道の恥辱よ、煌めく剣の穢れよ、
おお、わが一門の奥津城(おくつき)には面汚しの不名誉よ、
おお、あらゆる穢れた害悪に塗(まみ)れた不敬なる行いよ、
武人たる者が女々しい浮気心の奴隷になるとは、何たることだ。
真の武勇こそ常に真の敬意が払われるべきもの。
　ならば、俺の非行はあまりに穢れて、あまりに卑しい、
　俺の顔に醜く刻み付けられて、ずっと生き延びるのだ。

二〇〇

「そうだ、たとえ俺が死んでも、醜聞は生き残り、
眩しい金色のわが一門の紋章に汚点となって残るだろう。
何か忌むべき印(しるし)を紋章官は考案し、
いかに愚かに俺が愛にうつつを抜かしたか表そうとするだろう。

二〇五

一九八行　**わが一門の奥津城**　後世において一族が受ける世評のこと。紋章を描き入れた先祖の楯が、高貴な家柄の、遺体を安置する礼拝堂には立て掛けられていた事を指す。

二〇三行　**俺の顔に醜く刻み付けられて**　タークインは、高揚した罪の意識に苛まれて誇張しているのかもしれないが、新プラトン主義者の哲学において真剣に議論されたように、見栄えのよさは魂の美しさを反映するという当時流行の考え方に言及しているとも解釈できる。

二〇六行　**忌むべき印**　非道を犯した者の家紋には、それを示す図柄を紋章官が付け加えることがあったという。

俺の子孫たちは、その恥の印を恥じ入り、
　俺の遺骨を呪い、俺が彼らの父祖でなかったらと
　願うことを罪とは思わないであろう。　二二〇

「たとえ求めているものを得ても、所詮、何を勝ち得るというのだ。
夢か、幻か、泡にも似た束の間の悦楽か。
一体誰が、一瞬の快楽を購って一週間嘆き暮らすものか。
永遠を売り払って愛の玩具を手に入れようとするものか。
一粒の甘い葡萄欲しさに、蔓を台無しにするものか。
　どんな能無しの乞食であれ、ただ王冠に触れたいがために、　二二五
　王杖で直ちに打ち倒されてもよいと思うものか。

「もしかして、コラティヌスが俺の企みを夢に見れば、
とっさに眼を覚まし、激しい怒りに任せて、こちらへ早馬を飛ばし、
この邪悪な下心を食い止めようとするのではないか。
彼の結婚を危険に晒すこの攻囲、
青春にとってのこの汚点、賢者にとってのこの悲哀、
　死に瀕したこの徳、末代までのこの恥辱、　二三〇

二〇九-一〇行　「モーセの十戒」の五、父母を敬うことへの言及。この例のように、本詩は、キリスト教的道徳、古代ローマの慣習、エリザベス朝の騎士道など種々の糸が編み合わされて作られている。

二二〇-三行　五度畳み掛けられる「この」が切迫感を表す。前節（二一一-二一七行）と同様、修辞学でいう「コピア」"copia" の技法。

その罪を犯す者は、永久に消えぬ咎めを背負うことになるのだ。

「どのような言い抜けを拵えたらいいというのだ、　二三五
かくも腹黒い行為をお前に責め立てられるとき。
俺の舌は押し黙り、俺のか弱い手足は震えおののき、
俺の眼は光を見限り、俺の偽りの心の臓は血を流すのではないか。
罪業は大きいが、恐怖心はなおさら大きい。
度を越した恐怖心は、戦うことも逃げることも出来ない。　二三〇
ただ、臆病者よろしく、恐れで震えて死んでいくのみ。

「コラティヌスが俺の息子か父親を手にかけたなら、
俺を待ち伏せして欺き命を取ろうとしたなら、
俺の親しい友でなかったら、この欲望、
彼の妻を犯そうとする欲望にも、言い訳が立つかもしれない、　二三五
このような争いの復讐、または報復なのだという言い訳が。
だが、奴は俺の一族だ、俺の親しい友だ、
この道に外れた罪業には、言い訳も目的も通じない。

二二六行　**お前**　この瞑想を通じて、コラタインその人が三人称で存在し、その結果、突然想像の中で直接彼に呼びかけることで、タークィンは余計に自らの罪の意識を暴露する。一方、プリンスは、この一節のレトリックからして、この「お前」が誰なのか特定する必要はないとする。

二二八行　**俺の眼は光を見限り**　当時の考え方では、『ヴィーナスとアドウニス』八一六行、一〇五一行などと同様、眼は光の源で、自ら光を放つとされていた。

二三九-四二行　この当意即妙の返答は、典型的にセネカ的であり、例えば、『リチャード三世』五幕三場一八二行以下とか、『スペインの悲劇』三幕一場一九-二八行に見られる。

「恥ずべきことだ。正にそうだ、この行いが知られれば。
憎むべき行為だ。ただ、愛することには憎しみはないはず。
彼女に愛を乞おう。だが彼女は彼女のものでなく、夫のもの。
とはいえ、せいぜい拒絶され、叱責されるまでのこと。
俺の欲情は強く、弱弱しい理性の諫止にはびくともせぬ。
　金言とか老人の格言めいた説教を怖れる者は、
　壁掛けの教訓めいた図柄を見ただけで縮こまってしまう。」　二四〇

凍りついた良心と熱く燃える欲情との間を行きつ戻りつし、
タークィンは、恩寵に背を向けて議論を展開する。
諸々の善良な思いを脇に押しやり、
邪悪な意図を常に有利な立場へと押し進めようとする。
そのため、あらゆる清らかな感情は、瞬きする間に
　費え滅ぼされ、結局は、卑劣なことが
　徳高い行為と映るような運びとなる。　二四五

タークィンは言う、「彼女は優しく俺の手を取り、
夫の消息を聞こうと、俺の熱く燃える眼をまじまじと探った。　二五〇

二四五行　**壁掛け**　一六世紀には、絵が描かれた布の壁掛けはタペストリー（綴織）の安価な代替物であった。その目的は教訓めいた教えであり、聖書的・古典的主題や出来事が描かれ、脇には標語が添えてあった。タークィンは、その教訓が絵と同様に大したことはないと示唆しているのだが、本詩の一三六六行目以下で、ルークリースが見て問答する絵の場面を想起させるという点で見逃せない。

最愛のコラティヌスが陣取る軍営から、もしかして
苛酷な報せが来たのではと気が気でなかったのだ。
ああ、恐れが彼女の頬をどれほど赤く染め上げたことか。
　初めはリネンの上に並べられた真っ赤な薔薇のよう。
　それから薔薇が取り去られた後の、真っ白なリネンのようだった。　二五五

「彼女の手は、俺の手の中にしっかり閉じ込められたまま、
夫への誠実な気遣いで、俺の手をどんなに激しく震わせたことか。
俺の手の震えが彼女に悲しみを与え、彼女の手はいよいよ震えた、
やがて夫の無事安泰を耳にするまでは。
それを耳に収めると、彼女は甘く健やかに微笑んだ。
　ナルキッソスがいまそこで彼女を眼にしていたならば、
　自らに恋して河で溺れ死ぬことはなかったろうに。　二六〇

「ならばなぜ、この俺は飾り立てた口実を選りあさるのか。
美が論陣を張るとき、雄弁家といえども沈黙してしまうもの。
つまらぬ奴らはつまらぬ咎にも惨めに後悔する。
実のない影に脅える者の心には、愛が実をつけることはない。　二六五

二七〇

二六五行　**ナルキッソス**　水鏡に映った己れの美しい顔に恋したナルキッソスは、妖精エコーの求愛を受け入れず、水鏡の己れの唇にキスしようとして川に落ち、溺れ死んだ。そこから水仙の花が咲き出たという。

情欲が俺の将軍、彼が指揮を執る。
　彼の華やかな軍旗が翻るとき、
　臆病者でも奮い立ち、怖れることなく戦うのだ。

「ならば、立ち去れ、子供じみた恐怖心よ。消えろ、狐疑逡巡。
周到と理性とは皺だらけの老人に付き添うがいい。
俺の心には俺の眼の命令に逆らうようなまねはさせない。
深刻な戸惑いと深い憂慮は賢者にこそ似つかわしい。
俺の演じる役は若さ、こんな輩（やから）は舞台から叩き出すぞ。
　欲望が俺の水先案内人、美が俺の狙う獲物。
　美の宝箱が眠っているのに、誰が潜ることを恐れようか。」　二七五

雑草に覆われた小麦のように、用心深い恐怖心は、
抗いがたい情欲にほとんど息の根を止められかける。
情欲に駆られたタークィンは耳の穴を大きく開けて忍び込む、
穢れた希望に胸膨れ、愚かな不安に取り付かれて。
希望と不安のいずれもが、不正なる者の従者とばかり、
相矛盾する助言をして彼の行く手を阻もうとするゆえに、　二八〇　二八五

ある時は和睦を、ある時は侵攻を誓う。
彼の想いの中には、彼女の神々しい姿が鎮座し、
同じ玉座にはコラタインが収まっている。
彼女を眺める夫の視線が彼の正気を狂わせる。
夫を見つめる妻の視線は、なおいっそう神々しく、
偽りの歪んだ眼には見向きもしない。
ただひたすら心に対して純な嘆願で迫ろうとするが、
すでに穢れた心は、いっそう邪悪な側に味方して、　二九〇

己の中の卑しい情欲の軍勢を叱咤激励する。
卑しき軍勢は指揮官の快活な様子に鼓舞されて、
彼の情欲を膨らませる様は、時計の卑猥な針が時を刻むに似る。
隊長の興奮が高まるにつれて、兵士たちの士気も高まり、
課された義務以上の苦役まで果そうとする。
堕落した欲望に狂ったように導かれ、
ローマの王子はルークリースの寝床へと進軍する。　二九五　三〇〇

二九七行　このイメージがやや卑猥だと感じられるのは、『ロミオとジュリエット』二幕四場一一二-三行「その通り、日時計が淫らな指で、もう正午の急所を弄っているからね」とあるように、時計の針が真っ直ぐに立って12を指差すという淫らさを表すからである。

彼女の寝室と彼の欲情とを隔てる錠前は、
一つずつ抉じ開けられ、さし錠も道を譲った。
だが、開きながらも音立てて、彼の邪意に非を鳴らし、
忍び入るこの盗人にいくばくかの注意を促す。
敷居は扉を軋ませて、彼の居場所を教え、
夜の放浪者、鼬（いたち）どもは彼を見て叫ぶ。
これらに脅えながらも、なお彼は怖れの元を追い求める。　三〇五

各々の扉が嫌々ながらも彼に道を明け渡すとき、
その場所のわずかな隙間や割れ目から入り込んだ
風が、彼の道行きを阻もうと蝋燭の炎と抗い、
その煙を彼の顔めがけて吹き付けて、
この場での案内人、彼の蝋燭を吹き消した。
それでも彼の熱く燃える心は、痴情に焚きつけられて、
別な風を吹き送り、蝋燭に火を灯す。　三一〇

灯りがともると、光を頼りに彼の眼に映るのは、
ルクレツィアの手袋、縫い針がまだ刺したままだ。　三一五

三〇七行　鼬は小さい夜行性の食肉動物で、狡猾で用心深く、前兆となる動物とされ、ここでは夜を盗むもの。古代ローマの屋敷では、害虫駆除のため飼われていたという。次行でタークインが内省的恐怖心を掻き立てられる瞬間の合図となるにふさわしい。

三〇八行　ここで、タークインは自らの欲望の餌食となっている。

床に敷いてあるイグサから手袋を拾い上げ
握り締めると、針が彼の指を突き刺す、
「この手袋はふしだらな悪戯とは無縁です。
　急いで戻しなさい。お分かりでしょう、装飾の品とて、
　わが夫人の私物は貞淑であることが」とでも言わんばかりに。

だが、これらが阻もうとしても、力貧しく彼を止められない。
彼はこの拒絶をこの上なく身勝手に解釈したのだ。
扉も、風も、手袋も、こぞって彼を引きとめようとしたのに、
己の決意の固さを試す偶然の出来事としか思わない。
あるいは、時計の針を秒刻みに止める文字盤の刻み目としか。
　それは手間取らせ遅らせて時計の針の進行を阻むが、
　やがては一分ずつが過ぎて一時間となり借りを返すことになる。

「ふむ、ふむ」と彼、「こういう邪魔立てこそこの時にふさわしい。
時として春の到来を脅かすわずかな霜のようなもの。
春の盛りのめでたさにかえって大きな賑わいを添え、
寒さに縮こまる鳥たちをいっそう華やかに歌わせる。

三一〇

三一五

三三〇

三一八行　**イグサ**　床の敷物としてローマ時代には敷かれていた。『シンベリン』二幕二場一二-四行「かつてローマのタークィンは／貞女ルークリースを犯そうと、彼女を目覚めさせる前に／床に敷かれたイグサを静かに踏んで行ったのだ」を参照。

苦痛とは、高価な品物を購うための手付金。
巨大な岩、激しい嵐、屈強な海賊、岩棚、砂洲、
商人は、これらの恐怖を経てこそ、巨富を得て帰郷できるのだ。」　三三五

今や彼は寝室の扉へとやって来た。
彼が焦がれる至上の悦楽から彼を閉め出す扉へと。
扉には外し易い掛け金一つ、他には何もない、
目当ての馥郁たる楽園から彼の行く手を遮るものは。　三四〇
彼は、不敬な想いにすっかり我を忘れ、
大願成就して獲物を与えたまえと祈りだす始末、
あたかも神々も彼の罪を嘉したもうかのように。

だが、祈りも空しく一向に実りがない、
穢れた想いの我ながら、この穢れを知らない美女を抱擁し、
抱擁の一瞬を嘉したまえと、永遠の神々に　三四五
いくら懇願してみても。その只中で、
はっとして彼は言う、「どうしても花を散らさねばならぬ。
俺が祈りを捧げる神々がこの悪行を忌み嫌われるのは必定。

ならばどうしてこの行いを助けてくれるというのだ。　三五〇

「それなら、愛と運命が俺の神々、俺の道案内になるがいい。
確固たる決意が俺の欲望の介添え役だ。
想いなど、行為として試されない限り夢幻のごときもの。
極悪の罪でさえ、赦免されればすっかり洗い流される。
愛の炎にあたれば、恐怖の霜は融けずにはおかぬ。
天の眼は消えた。夜の霧が包み隠してくれようぞ、　三五五
甘い快楽の後に訪れる恥の意識を。」

こう言うと、罪に染まった彼の手が掛け金を引き抜き、
彼の膝で扉を大きく開け放つ。
鳩はぐっすりと眠っている、夜の梟に狙われているのに。
このように、反逆は反逆者が現れる前に進行しているのだ。
茂みに潜む蛇を見ればだれしも脇に避ける、
だが、何の懸念もなく深々と眠りに落ちた彼女は、　三六〇
彼の恐るべき情欲の牙のなすがままだ。

三五八-九行　この二行には性的暗喩が隠されている。つまり、犠牲となる女の方に向う彼の歩みと、性的快楽を味わおうとする彼の目論見とには類似がある。扉を開けようとする彼の体の動きは、ルークリースの肉体を抉じ開けようとする彼の目的を予期させるものだ。

三六四行　ここで「牙」と訳した“sting”は、元々「棹」、「杖」の意で、恐らく「男根」の含みがある。同様の言葉遊びは『じゃじゃ馬馴らし』二幕一場二一三-四行「熊蜂の針がどこにあるのか知らない奴なんていない。／針があるのはお尻だ」に明らかである。

邪悪な企みを抱いて彼は寝室へと忍び入り、
いまだ汚れを知らぬ寝台を食い入るごとく凝視する。
貪婪な目の玉を眼窩でぐるぐる回しながら、
四方に帳（とばり）が引かれた寝床を回り歩く。
主君たる彼の心は眼が犯した大逆罪に誑かされて、
　すぐさま彼の手に総攻撃の合図を送る、
　清純な銀の月を隠す雲の幕を引き開けよ、と。

美しい太陽光線が火矢のように眩しく雲間から　三六五
迸り出て、地上の人の視力を奪うように、
その様に似て、寝台の帳を引き開けたとき彼の眼は、
圧倒的な光に眩まされて、思わず閉ざしかける。
目の前が真っ白になったのは、彼女があまりに眩しく　三七〇
　輝いたためか、あるいは、何らかの恥を思い知ったためか。
　いずれにせよ、彼の眼は眩み、閉ざされたままであった。

おお、いっそ俺の眼があの暗い牢獄で死んでいてくれたなら。
それなら、よく分かっただろう、眼が犯した罪も終わったことが。　三七五　三八〇

三六八行　当時の寝台は四方をカーテンで囲まれ、眠るときには、カーテンを引いて、閉ざされた。

三六九行　**大逆罪**　ルークリースの手厚い持て成しに対する裏切り行為のみならず、タークインの自己欺瞞をも強調する言葉である。『ヴィーナスとアドウニス』一〇三九-五〇行では、心は王として描かれ、その安泰は家臣である眼の忠実な働きに懸かっているとされるが、本詩ではすでに眼が鋭敏に視力を働かせて物事を見極める機会が提供されていた（一八八-九四行）。物語が展開するにつれて、個人の責任という主題が徐々に一層顕著になってくる。

三七八行　『アストロフェルとステラ』九九番一二-四行「その時、私の眼は、その主人の命で、余儀なくも／瞼の墓場に埋められる。主人は恥じているのだ／そんな暗い心で、眼に見える光を見ることを」を参照。

そのときコラタインは再びルークリースの傍らに戻り、
自分の清らかな寝床で安眠をむさぼることができただろう。
だめだ、この眼は開かねばならぬ、この聖なる絆を断ち切るために。
　至純なるルークリースはこの両の眼に売り渡さねばならぬ、
　彼女の悦びを、彼女の命を、この世に生きる悦楽を。

三八五

真っ白な百合の手が薔薇色の頬の下に横たわり、
枕が当然受けるべき口付けを横取りしている。
枕は当然腹をたて、二つに割れて
両側で膨れ面をしている。至福を奪われたためだ。
二つの丘の間に彼女の頭は埋められ、
　淑徳の誉れ高い記念像のごとく眠っている、
　ただしそれを崇めるのは、淫らで不敬な眼。

三九〇

もう一方の綺麗な手は寝床からはみ出し、
緑の上掛けの上に置かれている。その手の純白は
草の辺に咲き誇る四月の雛菊のよう。
掌に浮かぶ真珠の汗は夜露にそっくり。

三九五

三八四-五行　この対句は、本詩で初めて、ルークリースの犠牲者としての側面を明らかにしている。

三八八行　枕が腹を立てるというこの奇想が生まれるのは、本詩の中で、柔らかな言葉の戯れを弄ぶこの一瞬のみである(ただし、一二三三-四行にその名残があるが)。そしてその時でさえ、奇想が生ずるのは、タークィンの欲望の眼差しの下でであり、「腹を立てた」枕は、彼のパロディとして読める。

三九一行　**淑徳の誉れ高い記念像**とは、数々の美徳がその者の姿勢と、墓石の記銘とに描かれた者の記念の像のこと。『オセロー』五幕二場五行で、眠るデズデモーナが「雪花石膏の記念像」になぞらえられている。

三九三-九行　突然牧歌的奇想が乱入するが、そのことで読者は、ほとんどの出来事が陰鬱な家の内部で起こり、健全で回復の起爆剤となる性質を奪われるのが物語の主人公の宿命であることに、かえって思い当たることになる。

彼女の瞼は金盞花の花弁のように眼の光を鞘に収め、
　瞳は暗い天蓋の下で馨しく眠っている、
　やがて時が来て見開かれ、朝日に彩を添えるまで。

金の糸のような彼女の細い髪は吐息と戯れていた。
おお、貞節な浮気者よ、浮気な貞節よ。
その様は死の似姿の中に生の凱旋を演出し、
生の期限の中に死のおぞましい顔を覗かせていた。
眠っている彼女の中で生と死がそれぞれを美化し、
　まるで両者の間には何ら争い事はなく、
　生は死の中に生き、死は生の中に生きていた。

彼女の乳房は丸い象牙の地球儀、青い海に取り巻かれた
いまだ征服されざる二つの処女地のよう。
夫の頸木（くびき）の他にはどんな重荷も知らず、
契りによって夫のみを一心に敬っていた。
これら二つの世界がタークィンの心に新たな野心を生みつけた。
　邪な簒奪者のようにこの美しい玉座から

四〇〇

四〇五

四一〇

三九七行　**金盞花の花弁のように**　ルークリースの閉じられた瞼の上の睫毛が、夜に閉じる金盞花の花弁に喩えられている。

三九八行　**暗い天蓋の下で**　『シンベリン』二幕二場一九-二二行「蝋燭の炎までが／この人のほうにたなびいて、瞼の下を覗き込もうとしている／この二つの窓の下、天蓋の内に収められているはずの／眩い光を拝みたいのだ」を参照。

四〇〇行　「金の」という形容辞と、髪と吐息の戯れ、そしてこの一節全体の鋭い逆説は、ペトラルカの有名なソネットの冒頭「彼女の金の髪はほつれて微風と戯れていた」（『抒情詩集』九〇番一行）を強く示唆する。

四〇〇-六行　ここに見られる通常は相争いあう要素（生と死、性と貞節）の逆説は、どれほど美しい楽園が今から汚されようとしているのかを、如実に印象付けようとする。

四〇二行　ここで「似姿」と訳した‘map’の上に引かれた多くの経緯線や地勢図に、顔立ちの各々の輪郭がしばしばなぞらえられる（一七一二行も参照）。

四〇七-八行　『ヒアロウとリアンダー』第二の歌二七三-八行「リアンダーは盛り上がった象牙の山をよじ登る。／山は青い環状の線で取り巻かれ、さながら地球儀のよう。／（地球儀と名づけるその訳は、それを廻って／愛の船は至福に満ちた国々へ航海するから。）／だが、シジュフォスよろしく、リアンダーの労役は無益に終わり／和平交渉の末、一時休戦が成立した」を参照。

その持ち主を追い落とそうと画策したのだ。
己の眼に映ずるものに、力一杯眼を凝らさなかったろうか。
己の眼を凝らしたものを、精一杯欲情しなかったろうか。
凝視したものを、彼は断固として溺愛した。
一途に見つめる眼を、欲情で肥らせた。
驚嘆に情欲を添えて、賛嘆し貪り見た、
彼女の深青の静脈を、雪花石膏（アラバスター）の肌を、
真っ赤な珊瑚の唇を、雪白の波立つ頤（おとがい）を。　四一〇

凶暴な獅子は、獲物を征服すれば激しい飢えも満たされ、
捕えた餌食をふざけて猫かわいがりもする、そのように、
タークィンは、安らかに眠るこの女を覗き込み立ち尽くす、
凝視するだけで、猛り狂う淫欲がおとなしくなって。
だが、それは一時休戦、鎮圧ではない。彼女の傍らに立つと、
つい今しがた淫欲の反乱を抑えてくれた彼の眼が
血をそそのかし、更なる擾乱へと駆り立てる。　四一五

四〇八行　既婚女性を「征服されざる処女地」と形容するのは奇妙であるが、ここでの主題は、厳密な意味での肉体の無垢ということから、所有の優先権ということへと転換している。結婚の誓いが定めるとおり、ルークリースは、肉体を捧げて夫を崇敬し（「契りによって夫のみを一心に敬っていた」）、部外者には絶対にそれを「明け渡さない」という意味で、性的に淑徳で「穢れていない」のである。この箇所は、オウィディウス『祭暦』第二巻八〇三-四行「彼は両手を延ばして彼女の乳房を必死で摑もうとした、／乳房ははじめて他人の手の感触に触れた」に負っている。

四一四-二〇行　ここには、眼で実際に見ることによって欲望が掻き立てられる様が、ありありと描かれている。「恋は眼から生まれる」というのは当時の常套手段であるが、ここではそのアイデアが、さらに一歩情欲へと進んでいる。

四一八行　「驚嘆」は、一般的には、純な眼のものであるが、タークィンは、ここで、「一途に見つめる眼」に欲情を添えて「貪り見る」。

四一九行　**雪花石膏**は半透明の石膏で、一六世紀には記念碑を建造するためにいまだ用いられていた。彫るときのその滑らかさが若い女性のすべらかな肌を描写するのに格好の形容路として、当時の詩人たちに好んで利用された。

血管は、略奪を事とする雑兵さながら、
血腥い殺戮と凌辱に惑溺し、
子供たちの涙も母親たちの呻きも顧慮せず、
冷酷な搾取を行う血も涙もない人でなしさながら、
総攻撃を今か今かと待ち望み、はちきれんばかりに膨れ上がる。
　やがて早鐘の心臓が攻撃の合図を打ち鳴らし、
　思う存分激しく攻めかかれと、突撃命令を発するのだ。

四三〇

彼の心臓は太鼓を叩いてぎらぎら燃える眼を励ます、
彼の眼は手に軍の指揮権を委ねる、
彼の手はかような権威に誇らしく勢い立ち、
猛々しい欲情に気色ばみ、地煙あげて橋頭堡を確保せんと進軍する、
彼女の沃土の中心、彼女のあらわな胸の上へと。
　青い静脈の守備隊は、彼の手がよじ登ると、
　薄蒼ざめ、二つの丸い小塔をなおざりにして退く。

四三五

一同は高貴な支配者、奥方様が安らかに住まわれる
ひっそりと奥まった小部屋に駆け込み、

四四〇

四二八-四八行　欲望によって女性を征服する行為を、軍事の総攻撃になぞらえるのは、『ヴィーナスとアドウニス』八八九-九八行、一〇三九-五〇行にも見られるように、一六世紀の恋愛詩に特徴的な技法。

四三五-七行　ここでの「前辞反復」（特定の単語を次の行の初めに置く技法で、この場合「眼」と「手」）は、テンポを加速させる。

四三九行　**胸**　彼女の胸は、砦、要塞、「沃土の中心」であるが、彼の胸（四三五行）は、そこに進撃侵入しようとする情欲という意味で、鋭い対象をなす。

恐ろしい敵に包囲されたことを報告し、
口々に叫んでは混乱を引き起こして、彼女を怯えさせる。
彼女は動転して、固く閉ざされた瞼をわずかに開く、
　瞳は騒乱の模様を覗おうとそっと顔を出すが、
　燃える蝋燭の炎で眩まされ、自由が利かない。

四四五

草木も眠る真夜中に、身の毛もよだつ夢に悩まされ、
鬱々とした眠りから覚めたとき、
何か恐ろしい悪霊を見たのではと思う人を想像してみればいい、
その不気味な顔に彼女の五体は震え上がる。
何と恐ろしいことか。だが彼女はさらにひどい驚愕に晒された、
　眠りをかき乱され、用心して眼を開けると映じたものは、
　架空の恐怖が現実となった光景だったのだ。

四五〇

数々の恐怖に呑み込まれ、取り乱した彼女は、
殺されたばかりの小鳥のように、小刻みに震えて横たわる。
眼を開く勇気は出ない。だが眼を瞑(つむ)ると瞼の裏には、
千変万化のおぞましい物の怪が姿を現す。

四五五

そのようなまやかしは弱った脳が捏造する作りもの。
彼女の脳髄は、眼が本来の持ち場から逃亡するのに憤激し、
暗闇でいっそう恐ろしい光景を見せて眼を尻込みさせる。

彼女の真白の胸に置かれたままの彼の手――
滑らかな象牙の城壁を打ち壊す乱暴な破城槌は、
彼女の心臓（哀れな住民）が狼狽し、壁に死ぬほど頭をぶつけ、
上へ下へと激しく動悸して、彼女の胸を内側から
この動きが彼の心に哀れみどころか、いっそう淫らな欲望を掻き立て、
城壁を破って、この馨しい街に侵入させようとする。

まずは彼の舌が喇叭手となって、意気消沈した敵に向かい
休戦の合図を吹き鳴らし始める。
敵手は白い敷布の上に、さらに白い顎を覗かせ、
この突然の乱入の所以を知ろうとする。
彼は言葉でなく仕草で示そうとする。
彼女は必死の嘆願でしつこく問いただす、
いかなる旗の下、この邪行を犯すのかと。

四六〇
四六五
四七〇
四七五

四六一行　**眼が本来の持ち場から**　眼は、ここでは、光の警護者としてイメージされている。

四六六行　彼女の心臓が、動揺して、それを包む肉体の壁に対してそれ自身を投げつけ砕けようとしている様を描写している。

四六七行　彼女の上下に激しく動悸する胸に置かれた彼の手もまた、それに合わせて激しく揺れるのである。

答えはこうだ、「そなたの顔の色香がその旗だ、
腹立ちゆえに白い百合を蒼ざめさせ、
辱めを受けて赤い薔薇を赤らめるその色香が、
わしの弁護人を買って出て、わが恋物語を語ってくれようぞ。
その旗の下、よじ登ろうとやって来た、
　難攻不落の砦に。その罪はそなたにある、
　そなたを裏切ってわしに売り渡すのは、その両の眼なのだから。

四八〇

「そなたが窘(たしな)めるなら、その先手を打ってこう言うぞ、
そなたを罠にかけ今宵の仕儀に至らせたのは、そなたの美しさだ。
さっさと諦めて俺の欲望に侍女としてかしずくしかないぞ。
この世の楽園としてそなたを見初めたこのわしの欲望に。
わしは力を振り絞り何とかこの欲情を制圧しようとしたのだ。
　だが、良心の咎めと理性が欲情を打ち滅ぼすたびに、
　そなたの艶麗さに育まれ、新たな欲望となって復活するのだ。

四八五

「わしには見える、この急襲がどういう障害をもたらすかが。

四九〇

四八二行　**砦、罪**　原文はそれぞれ“fort”，“fault”で、明らかに意図して音的に似た言葉を用いている。ここで「咎」とは、ルークリースの眼の美しさで、それがますます彼の情欲を焚きつけると自己弁明するのだ。

四八七行　**この世の楽園**　タークインは、天の楽園に行けるかもしれない機会を意図的に諦めてさえ、ルークリースというこの世の楽園を選択したというのである。

四九〇行　ルークリースの美しさは、光り輝く太陽と万物に実りを与えるその光の力にたとえられ、彼の欲望を育てると強弁する。

知ってもいる、どんな棘が咲き誇る薔薇を守っているかを。
わしには分かる、蜜は針で警護されていることも。
こんなことは前もって思慮分別には了解済みのことだ。
ところが、欲情は耳を貸さず、友人の熱心な忠告に耳もくれぬ。
　欲情には、美のみを食い入るように見つめる眼しかない、
　眼に映るものを一途に愛するのだ、法や義務に反してでもな。　四九五

「わしは心の中で繰り返し反芻してみた、
どんな悪、どんな恥、どんな悲哀が生ずることになるかと。
だが、何であれ激情の荒馬の行く手を阻むことはできぬ、
やたらと突き進む向う見ずな激しさを拒むことはできぬ。
わしは知っている、改悛の涙がこの行為の後に続くことを、
　非難、蔑視、恐るべき敵意がこの後続くことを。
　それでも、わしは必死になってわしの汚名となるそなたを抱くぞ。」　五〇〇

こう言うと、彼はローマの剣を高く振りかざす。
それは、大空に舞い上がった隼さながら、
羽影でその下の鳥を怯えさせて平伏させ、　五〇五

五〇〇-一行　シドニー『アストロフェルとステラ』二一番五-六行「プラントを読み、それで若駒のような放埒な慾動を抑えきれぬなら／所詮、益なき読書」を参照。

五〇五行　**ローマの剣**　この形容辞は、彼が自らの性格と高貴な家柄とを裏切っている様を表す。彼は由緒正しいはずの剣に、恥ずべき目的を授けているからだ。

五〇六、五〇九行　**隼**、**半月刀**は、原文ではそれぞれ“falcon₂”, “falchion”で、「曲がった」を介して言葉遊びしている。

曲がった嘴で、舞い上がれば殺すぞと威嚇するよう。
横柄な半月刀の下で、罪なきルクレティアは
　詮方なく横たわり、彼の言葉をじっと聴く、
　震え慄くさまは、隼の鈴の音を聞く鳥さながら。　五一〇

「ルークリースよ、今夜おまえを味わわずにはおかぬ。
拒むなら、腕づくで思い通りにするまで。
おまえの寝床でおまえを殺してもいいのだぞ。
その後で、おまえに仕えるくず同然の奴隷を虐殺し、
おまえの命の終わりと共におまえの名誉も終わらせてやる。
　息絶えたおまえの腕に奴隷を抱かせ、
　二人が抱き合っているのを見たゆえ、刺し殺したと誓うぞ。　五一五

「さすれば、おまえの残された夫は、ずっと
物見高い世の人々の嘲りの的となる。
おまえの一族はこの侮蔑に耐えられず頭を垂れ、
おまえの子供は私生児の烙印を押され辱められよう。
彼らが誹謗される元凶、その張本人であるおまえは、　五二〇

五一二-二五行　タークィンは、実にあくどい手段を使って、何としてでも、ルークリースにいうことを聞かせようと画策している。

五一五行　この奴隷について、チョーサーはルークリースに仕える従者と解し、ペインターはタークィン自身の従者の一人としている。通常、貴族は従者も連れずに旅をすることはないが、しかし、タークィンは、「梗概」にあるとおり、密かに単身でやって来たのである。ここで、「おまえに仕えるくず同然の奴隷を虐殺し」というタークィンの脅し文句は、彼女の一族全体に不名誉の汚辱を擦り付けてやるという意味で、彼の嘘の告発が、彼女に与えることになる汚名を強調している。

五二二行　タークィンの脅し文句の意味は、ルークリースが奴隷と姦淫の寝床で殺されているのを発見されれば、彼女と夫との間に生まれた子供たちも、その正嫡性を疑われ、夫以外の男の子ではないかと噂を立てられることになるということ。

おまえの罪をわらべ歌に歌い込まれ、
後々までわらべたちに歌い継がれていく。

「だがわしに従えば、友となって秘密は守るぞ。
罪とて人に知られねば、実行されない考えのようなもの。
大きな善の目的のためなされた小さな悪は、
合法的な方便として受け入れられる。
毒草だって他の草とうまく調合すれば、時には、
毒が抜けて良薬となる。作り方次第で、
毒の効き目が清められ消えてしまうというわけだ。

「ならば、おまえの夫のため、おまえの子供たちのため、
わしの求めによい顔を向けてくれ。彼らに残してはならぬ、
恥辱を、どんなに手段を尽くしても取り去れない恥辱を。
それは絶対に忘れられない汚辱となるぞ。
奴隷の焼印さえ、出生のときの醜い痣さえ、まだましだ。
生まれたときの瑕なら、造化の女神の過ちだし、
持って生まれた本人の汚名ではないからな。」

五二五　五三〇　五三五

五二九行　**合法的な方便**　この言葉は、結果が手段を正当化し、小さな悪は、よい結果が伴えば、是認されるという「マキャベリズム」を強く連想させる。

五三七行　**奴隷の焼印**　奴隷や重罪犯に課される罰としての焼印のこと。エドワード六世とエリザベス一世の御世に、ごろつき、浮浪者、ヤクザ者、乞食などが、肩に「R」の焼印を押されたのは、それらの不定住者を取り締まり、引き受け手に奴隷として引き渡すためであった。

ここで、人を睨み殺す鶏蛇（コカトリス）の恐るべき目付きをし、
襲いかかろうと身を奮い立たせ、息を整える。
一方、ルークリース、清純な恭順の化身は、
鷲獅子（グリフィン）の鋭い爪に抑えられた白い雌鹿も同然、
必死に哀れみを請う。だがそこは人の掟の通わぬ荒野、
　猛り狂う獣は気高い正義も知らず、
　何ものも受け付けぬ、ただ邪な欲望のほかには。　五四〇

真っ黒な顔をした雲が群がって世界を脅かし、
暗い霧の中に高く聳える山々を覆い隠すとき、
大地の子宮の暗闇からは一陣の風が穏やかに生まれ、
これら漆黒の靄をその住家から吹き払い、
世界から隔てることで、雨となっての急襲を食い止める。
　そのように、彼女の言葉が彼の罪深い性急さを遅らせる。
　オルフェウスが奏でる間は、陰鬱なプルートーも目を閉じるのだ。
だが、夜も寝ずにいる薄汚れた猫のように、彼はただ弄ぶのみ。　五四五

五五〇

五四〇行　**鶏蛇**は雄鶏の卵から生まれ、頭・羽・脚は鶏、胴体・尾は蛇で、その息を吹きかけられるか、睨まれるかすると、その人は直ちに死ぬと言われる伝説・神話上の怪物。龍やグリフィン（獅子の胴体に鷲の頭と翼を持つ怪獣。五四三行参照）に次いで紋章図形に多用された。忘れてならないのは、"cockatrice" がエリザベス朝には、売春婦をも意味したことである。神話上の怪物がタークィンの情欲の恐るべき力を孕んでいるというのは、彼が日常的な普通の状態から異様な見知らぬ存在へと変貌していることを示唆する。

五四三行　**白い雌鹿**　ペトラルカは白い雌鹿を「純潔・純白」のシンボルとしている（『抒情詩集』一九〇番）。

五五三行　太陽神、音楽の神アポロンと雄弁と叙事詩の女神カリオペとの間に生まれたトラキアの詩人で音楽家。彼の奏する竪琴の美しい調べは、鳥獣草木さえも魅了したという。死別した妻ユウリュディケーを追って地下世界に下り、音楽で冥界の王プルートーの心を動かし「地上に帰り着くまで、決して振り返って後ろから着いて来ているはずの妻の顔を見ない」という約束で、妻を連れ戻すことになったが、とうとう出口というときに、その約束を破ったために、その希望を果せず、永遠に妻を失うことになった。プルートーの恵みは、結局、単に実行を遅らせるだけということになり、今の状況に似合っている。

彼の足にしっかりと捕えられたまま、か弱い鼠は喘ぎ苦しむ。
真顔の振舞いは猛禽の狂った欲望を肥らせる、　五五五
満腹でもまだ食い足りない大食らいの渦巻きさながら。
彼女の嘆願は彼の耳には入るが、心には、岩をも通す
　彼女の痛切な哀願も届かず、入り口で撥ね付けられる。
　涙は欲情をかえって頑なにする、大理石なら雨に穿たれるのに。

憐れみを哀願する彼女の眼差しは、真剣に、
彼の眉をひそめた無慈悲な顔の上に注がれる。　五六〇
雄弁な慎ましさが溜息と混ざり合い、
彼女の言辞にいっそうの華を添えた。
彼女は句読点の置き所をともすれば間違え、
　文の中途で言葉をとぎらせ、
　言い終わらぬうちにまた始めねばならない。　五六五

彼女は嘆願する、高きにいます全能のジョーヴ神にかけて、
騎士道の精神、尊い家柄、大切な友情の誓いにかけて、
この謂われのない涙、夫への愛にかけて、

人間の聖なる掟、人の世の信義にかけて、
天と地、そして天地のあらゆる力にかけて、
　どうか一夜の客の寝床へお退りくださいと。
　邪(よこしま)な欲望にではなく、名誉に膝を折ってくださいと。　五七〇

彼女は言う、「あなた様が申し出ておられるような黒い謝礼で、
折角の持て成しにお報いになられては困ります。
水を差し上げた清らな泉を泥塗れにされては困ります。
二度と繕えないものを壊されたら困ります。　五七五
矢が的を射抜かないうちに、的外れな狙いをお止めください。
　いやしくも猟師なら、季節外れの牝鹿を
　哀れにも、射止めようと弓を引くものなどいません。　五八〇

「夫はあなた様の友人です。夫に免じてご容赦ください。
あなた様は剛の者。身の程を弁えてお下がりください。
わたくしはか弱い女。だから罠に嵌めてはなりません。
あなた様は人を欺く方とは見えません、だから欺いてはなりません。
わたくしの吐息は旋風となってあなた様を飛ばそうと喘いでいます。　五八五

男が女の嘆きに心を動かすものなら、
わたくしの涙に、吐息に、呻きに、心を動かしてください。

「これらすべてが一つになり、逆巻く大海原のように、
船を脅かす岩のようなわたくしの心に打ち寄せています、
絶え間なく動いてあなた様の御心を柔らげようと。
五九〇　巌も溶ければ水になりますもの。
ああ、あなた様が石より固くなければ、
わたくしの涙に溶けて、どうか哀れんでください。
憐憫は柔らかでも鉄の門へと入り込むのです。

「タークイン様に瓜二つのあなた様を客として歓待しました。
五九五　あの御方の姿を纏われたのは、あの御方を辱めるためですか。
天の神々の軍勢にわたくしは哀訴します。
あなた様はあの方の名誉を侮辱し、王族の御名を傷つけています。
あなた様は見かけ通りの方ではありません。同じ方だとしても、
今のあなた様は真のあなた様、神、王である方とは思えません。
六〇〇　王たるものは神々のごとく万物の支配者であるはずですから。

五八八行　逆説的な哀訴である。伝統的な恋愛詩でこのような訴え方をするのは、貞節・純潔ではなく、官能的な情愛であるからだ。

五八九-九五行　この一節には、「マタイ伝」第七章の反映が見られる。「雨が降り、洪水が押し寄せ、暴風が吹いてその家を襲った。しかし家は崩れなかった。岩の上に礎を築いていたからである」（二五節）、「狭い門を通って入れ、滅びへと導く門は広く、その道は広大である」（一三節）を参照。もしこの反響が意識的であれば、これらが皮肉的に響くのは、タークィンの心がこの寓話を語る賢人の心とは違って、まさにその逆向きにあるからだ。

六〇一行　シェイクスピア劇、彼の同時代の劇には、慈悲深い支配こそ王たる者の神々しい特質とする例が、しばしば描かれる。例えば、『タイタス・アンドロニカス』一幕一場一一七-八行「神々に近づこうとする心がおありで

「あなた様の恥はその盛りにはどんなに熟れきったものになるでしょう、
かように、春も来ぬうちにあなた様の悪徳が蕾をつけるのなら。
まだ王位に就く前に、これほど残虐な暴行を働くのならば、
王になってしまえば、どんな悪辣非道もやりかねない。
ああ、忘れてはなりませぬ、下賤の者が犯す　六〇五
　非道でさえ、綺麗に拭い去ることは出来ぬもの。
　王の悪行となれば、死後も隠し通せは出来ませぬ。

「こんなことを為されば、ただ恐怖ゆえに愛される王となる。
でも、めでたき君主はいつも愛ゆえに畏れ敬われます。　六一〇
汚らわしい犯罪者を黙認せざるを得なくなりますよ、
彼らがあなた様の中に似たような犯罪の証拠を嗅ぎつけるとき。
ただもうそれを怖れて、この欲望を取り除いてください。
　君主とは鏡であり、学舎（まなびや）であり、書物です、
　臣下の眼はそれを眺め、そこで学び、それを読むのです。　六一五
「なのに、あなた様は情欲に教えを垂れる学舎になるおつもりですか。

すか。／まずは慈悲を示すことで神々に近づいてください」を参照。

六一五-六行　『ヘンリー四世第二部』二幕三場三一-二行「彼は世の人の流儀を形作り、彼らの仰ぎ見る鑑であり／お手本とする教科書でした」を参照。

情欲があなた様の中で恥についての読み書きを学ぶのですか。
あなた様は自ら鏡となり、その中に、情欲をして、
罪が赦免される法的根拠を、恥行の許可を識別させるおつもりか、
あなた様の名において、汚辱に特権を与えるために。
　あなた様は永き世の誉れに逆らって恥辱の肩を持ち、
　麗しき名声をただの女衒に過ぎぬものにされている。　六二〇

「指揮権をお持ちでしょう。それを下賜された御方に誓って
清らかな御心から謀反人の欲情を追放してください。
不正を防護するため剣を抜いてはなりません。　六二五
その剣は不正の輩を退治するために貸与されたものだから。
君主としての責務をどうして果せると言えますか、
　汚らしい〈罪〉が、あなた様の過ちを手本とし、
　罪の犯し方を学んだ、あなた様に仕込まれたと断言するときに。

「頭を冷やしてお考えください、今のような罪悪行為を
他人が犯すのを見れば、どんなに賤しむべき悪業と映ることか。
過ちは犯した本人の眼にはめったに見えないもの。　六三〇

六二七行　**不正の輩**　原文“all the brood”は、罪の大軍が情欲に満ちた性行為によって育まれるイメージをありありと描いている。シェイクスピアはこのイメージを、スペンサー『妖精の女王』第一巻第一篇二五連「汚らわしい迷妄の、散らばっていた同胞ども“scattered brood”」から思いついたのかもしれない。

わが身可愛さで一方的に道に外れた行いを押し殺してしまうのです。
弟君がこんな罪を犯したら、死に値すると思われるでしょう。
　ああ、何と汚辱まみれになっていることでしょうか、
　己の悪事から眼をそむける人たちは。　六三五

「あなたに、あなた様に向かって、両手を差し上げ嘆願します、
あなた様が向う見ずにも当てにされている、誘惑的な情欲にではない。
追放された国王の威厳が帰還することを訴えます。
彼を召還し、阿諛追従しか知らぬ欺瞞を退却させてください。　六四〇
徳を重んじる思慮が嘘つきの欲望を牢に閉じ込め、
　あなた様の愛欲に溺れた眼から暗い靄を拭き取ってくだされば、
　あなた様には今の状況がよく見え、わたくしを哀れと思われるでしょう。」

「もう止めよ」と彼、「わしの潮は手に負えぬ。
こんな妨害で流れは変わらぬ、いよいよ高まり勢いを増すだけだ。
小さな明かりはすぐに吹き消されるが、巨大な炎は持ちこたえ、
風を受けてますます激しく燃え盛る。　六四五

六三八行　**両手を差し上げ**　一一一行の「手を高々と上に挙げて、喜びを表した」のと同じ演劇的仕草ではあるが、ここでの意味合いは無論それとは異なり、哀れを乞う行為である。

ちっぽけな川は王たる大海原に日々貢物を捧げている、だが、
　川の真水が奔流となって勢いよく海の水位を高めはしても、
　　海の塩味が変わることはないのだ。」　六五〇

「あなた様は」と応えて彼女、「海です、至上の王です、
御覧なさい、その限りない大海原へと流れ込んでいます、
邪悪な淫欲が、不名誉が、恥辱が、不品行が。
これらは総掛かりであなた様の血族という大海を汚そうとしています。
これらの取るに足りぬ悪どもがあなた様の善なる資質を変えるなら、　六五五
　あなた様の海は水溜りの奥深くに閉じ込められることになります。
　水溜りがあなた様の大海へ散らばって消えていくのでなくて。

「こうしてこの奴隷どもが王となり、あなた様はその奴隷となる。
高貴な家柄のあなた様が下賤の者となり、下賤の者どもが威厳を持つ。
あなた様は彼らに美しい生を与え、彼らはあなた様の汚らしい墓となる。　六六〇
あなた様は恥辱に包まれ忌避され、彼らは壮麗さに包まれ崇敬される。
小さなものが大きなものを覆い隠す理屈は通りません。
　杉の木が卑しい潅木の足元に平伏（ひれふ）すことはありませんが、

六四九-五一行　タークィンの言わんとするところは、純情無垢の訴えをいくら懸命に実行しても（真水が奔流となって注ぎ込む）、海の水位（彼の決意）を勢いづかせるだけで、その性質（潮味）を変えることは出来ないということだ。「塩味」には「税・貢物、進貢国」、「支流」、さらに「情欲」の意味がある。

六五二-八行　ルークリースは前節のタークィンの主張を占有し転用する。「流れ込む」、「取るに足りぬ」を再利用して、注意深く自らの議論の修辞的目的に充当している。

六五七行　字義通りには、「小さな水溜りの子宮（“womb”）中に埋葬される（“hearsed”）ことになる」で、ここでは、“womb”と“tomb”の対照的な効果を利用している。「私の成熟した思考を脳髄の中に埋葬し／思考が育てられた子宮を墓に変えたのは」（『ソネット集』八六番三-四行）を参照。

六六四行　当時の諺（Tilley C208）を踏まえたものだが、「列王記上」四章三三節に「彼はレバノンの杉から石垣に生えるヒソプに至る草木についてまで論じ」とある、ソロモンの知恵を述べた箇所まで遡及する。この言葉は、「最も高きものから最も低きものまで」と注釈される。

低い潅木は杉の根元で枯れて萎びるのです。

「だからこそ、あなた様の思いを、威儀ある御身分のさもしい下僕を―」　六六五

「もうよい」と彼、「天に誓って、これ以上は聞かぬぞ。

わが愛を聞きいれよ。さもなくば、愛の繊細な手触りの代わりに、

憎しみが腕づくで、おまえを荒々しく引き裂き涙させるばかりだ。

それが済めば、悪辣無残にも、卑しい下僕のさもしい寝床へ

おまえを運んでいき、この恥ずべき淫らな運命の　六七〇

ともがらとして二人もろとも処分する決意だ。」

こう言うと、彼は灯火を踏み消した。

明光と情欲とは、恐るべき宿敵同士だから。

恥は、すべてを覆い隠して見えなくする夜に包み込まれて、

最も人目につかぬとき、暴虐の限りを尽くすもの。　六七五

狼は獲物を捕えた、哀れな子羊は泣き叫ぶ。

だが、彼女の声はベッドの白い敷布で塞がれ、

彼女の叫びは馨しい唇の囲い檻のなかに葬り去られる。

なぜなら彼は、彼女が着ている夜の寝具で
悲痛な叫びを彼女の口の中に閉じ込めたからだ。
彼の熱く火照った顔を冷ますのは、この上なく貞節な涙、
慎ましい眼が悲しみのためかつて流した最も純潔な涙だ。
おお、勇み立つ情欲がかくも清純な寝床を汚すとは！
　泣いて汚れが清められるものならば、
　彼女の涙は止めどなくいつまでも滴り落ちたであろう。

だが、彼女は命より大事な宝を失った。
そして、彼が手に入れたものは、良心の呵責のみ。
腕づくで勝ち取ったこの同盟は、新たな紛争を生み出す。
束の間のこの快楽は、数ヶ月の苦痛の種となる。
燃えたぎるこの欲望は、凍える後悔の念へと変わる。
　清純な貞節は、彼女の宝箱から略奪されたが、
　情欲という盗人は、前よりずっと貧しくなった。

満腹の猟犬や餌食を食い過ぎた禿鷹は、
微かな臭いを追うことにも、素早い飛翔にも食指が動かず、

六八〇

六八五

六九〇

六八〇-六行　この連自体と、次の連との空白の中で凌辱が実行されている。とりわけ、この空白は、意味深である。六八〇行の “the nightly linen that she wears” は、「寝具」なのか「寝着」なのか意見が分かれるが、六七八行の “her own white fleece” と共に、「敷布」、「寝具」と訳した。

追跡の速度が鈍る。あるいは、生来喜んで食り食らう
獲物をみすみす見逃してしまう。ちょうどそのように、
快楽に耽溺したその夜のタークインも食傷気味。
　味わいは美味であったが、消化すると酸っぱくなり、
　さもしく食い荒らすことで食いつないだ欲望を食らい尽くす。

六九五

おお、底知れぬ深い罪よ、静かな瞑想に浸っても
とうてい想像もつかぬほど、無間地獄の深い罪よ！
酔っ払った欲望は胃の腑に入れたものを吐き出して、
はじめて、おのれのおぞましさが見えるものだ。

七〇〇

情欲が驕り高ぶっているうちは、いくら非難しても、
　その熱に、その向う見ずな欲望に歯止めは掛けられぬ。
　暴走する欲情があばずれ馬のように自ずとくたびれるのを待つのみ。

七〇五

やがて、頬はげんなりとやつれて、色蒼ざめ、
どんよりした眼、顰めた眉、覚束ない足取りで、
弱った欲望は、敗残兵のように気落ちして、哀れに意気地なく、
無一文の乞食さながら、おのれの窮状を泣訴（きゅうそ）する。

七一〇

六九八-七〇〇行　淫欲の特質について軽蔑的に活写している『ソネット集』一二九番五-七行に「人は一旦淫欲を享受し終れば、忽ちにして侮蔑する。／分別を忘れて求めても、手に入れてしまえば／分別を忘れてこれを憎む」とある。

七〇八-一一行　事を果し終えた後の（道徳的、肉体的に破産した）淫欲を擬人化してこのように描くのは、中世的、スペンサー的残響がある。

肉体が興奮するときは、欲望は神の恩寵に眼もくれぬ、
　肉の快楽に惑溺するからだ。だが、肉の緊張が衰えると、
　この疚（やま）しい反逆者はその赦免を乞い願う。

同じことだ、この許しがたい罪を犯したローマの王子の場合も。
肉の欲望を熱く燃えて追い求め、今では
おのれを裁く運命の判決を高らかに布告したのだ、
いついつまでも恥辱に塗れて突っ立たねばならぬと。
その上、彼の大事な魂が住まう美しい神殿が踏みにじられ、
　崩落したその残骸の元へ憂慮の軍勢が馳せ参じ、
　穢された王女に向かい、いかがいたしましたと問いかける。

穢された魂は訴える、家臣どもが汚らわしい反乱を企て、
神聖な城壁を打ち壊し、
大罪を犯して、不滅のこの身を征服し、
隷従の身へと貶めたのだ、
生きながらの死、永劫の苦しみに繋がれる身の上へと。
　家臣どもの心を予測して、絶えず支配してきたが、

七一五

七二〇

七二五

七一九-二三行　ここの比喩形象は、攻撃に晒されたルークリースの状況を描いた四三九-四八行目のそれに対応する。見落とせない点は、タークィンの「神殿」が、あたかも凌辱行為と共に道徳的な自責の念に駆られ、自らの内部に住まうルークリースを犯しているかのごとく、女性として描かれていることだ。

七一九行　**美しい神殿**　神に最も近い所にあり、魂の黙想的な部分を反映する。魂には、この他に認識的・悟性的部分があるが、それは諸感覚の一つとされる。ここには、「コリント人への第一の手紙」三章一六節「あなたがたは神の宮なのであって、神の霊があなたがたのうちに住んでいるということを知らないのか」の残響がある。

予見だけでは、彼らの欲望の機先を制することは出来なかったと。
まさしくこの思いに囚われて、暗い闇夜を彼は忍び去る。
罪の捕虜となった勝利者は、得ることで失くしてしまったのだ。
何をもってしても癒せない傷を、
どんな治療も拒み、消えることのない傷痕を抱えて立ち去る。
後に残るは、さらに大きな苦悶に掻き乱された餌食のみ。
女は、男が残していった情欲の重荷を背負い、
男は、罪深い心の重荷を背負うのだ。　七三〇

男は、泥棒犬のように、悲しげにそこから這い出す。
女は、疲れ果てた子羊のように、そこに喘ぎながら横たわる。
男は、顔をしかめ、犯した罪ゆえにおのれを憎悪する。
女は、絶望のあまり、爪を立てて自分の体を引き裂く。
男は、罪の恐怖で冷や汗して、すごすごと逃げ去る。
女は、留まって、呪わしい夜に非難の言葉を吐き散らす。
男は、走り逃げて、とうに消えてしまった忌わしい快楽をなじる。　七三五　七四〇

七二七-八行　危険の予知能力を持つ魂は、それを持たない欲望の上位に位置して支配するが、欲望の反乱の先手を打つには十分ではなかったということ。これは、人間が罪を犯して堕落する意志（欲望）を、神が予知していたという神学的概念と呼応するが、違うのは、神は自ら望めばそのような堕罪を防げたのに、人間の自由意志に任せたという点である。

七三九行　恐らく、自分を裏切って、情欲の眼に晒した自らの美しさに激怒して、こういう行為に走ったのであろう。一四七一-二行を参照。

＊翻訳にさ、John Roe ed., *The Poems*. “The New Cambridge Shakespeare”. Cambridge Univ. Press, 2006を定本とし、詳細な注解には助けられた。この他、Katherine Duncan-Jones & H. R. Woudhuysen eds., *Shakespeare's Poems*. “The Arden 3rd Shakeapeare”. London: Thomson Learning, 2007.; Colin Burrow ed., *William Shakespeare: The Complete Sonnets and Poems*. “Oxford World's Classics”. Oxford Univ. Press, 2002を適宜参照した。

＊翻訳に当たっては、鹿児島大学名誉教授大塚定徳氏のご助力を賜った。また、本詩を含めて、『ソネット集』を除くシェイクスピアの全詩集の翻訳は、大塚定徳・村里好俊訳『新訳シェイクスピア詩集』として、近刊予定である。